

水と文学 (16)



前東京都水道局理事 小泉 智和

「水五訓」。

「水徳五訓」或いは「水五則」とも言われます。

社是にしている会社もあります。また、全国各地にある湧水地のところで、京都・貴船神社（水の神様）から勧請された祠があり、そこで「水五訓」の掲示をよく見ることがあります。

巷間、「水五訓」は、戦国武将の黒田如水が人生訓にしていたと言われていいます。

しかし、この言葉、如水が本当に人生訓としていたのかどうか？真意の程は確かではありません。

筆者は、如水の資料を多数所蔵する「福岡市博物館」に照会を致しました。返事は、「藩の歴史書“黒田家譜”や在野の歴史書“古郷物語”などの文献を見ても“如水の水五訓”の逸話は見つからない」とのことでした。

ともあれ、水のごとしと名乗っていた黒田如水とはどんな人物だったのでしょうか。色々と書物はありますが、ここでは、

童門冬二の「黒田如水」を紹介しましょう。

童門の著作は、古い歴史を現代に置き換えて、平易な話し言葉で書かれていますので、大変読みやすく、皆さんにお薦めします。

○ 童門冬二の略歴

童門冬二は、本名太田久行で、昭和2年（1927）東京に生まれました。

昭和20年8月15日、特攻隊員として、硫黄島にある米軍のB29の基地を特攻するため、青森県三沢の海軍航空隊基地に居ましたが、終戦を迎えます。

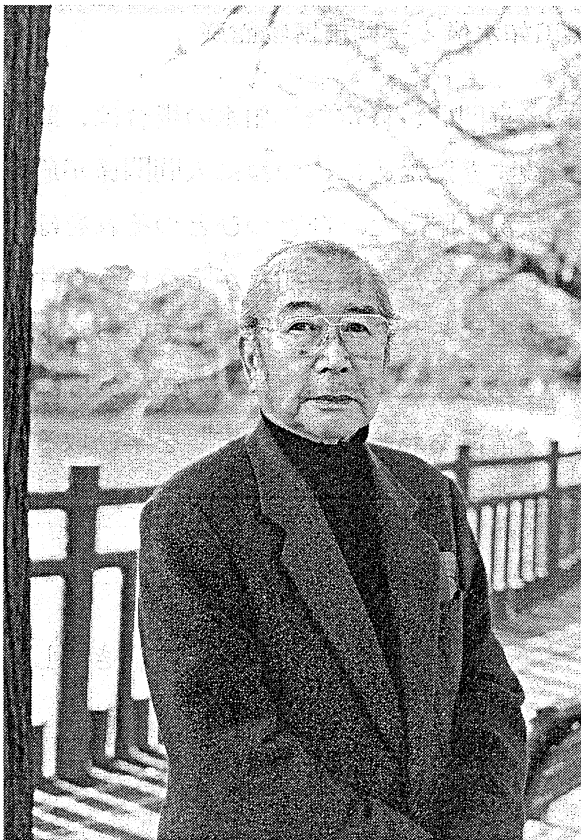
戦後、空への憧れ絶ち難く、米軍が接収している羽田飛行場に勤務しますが、生活の途を求めて目黒区役所から東京都庁に移ります。美濃部亮吉都政下では、知事秘書、広報室長、企画調整室長、政策室長などを歴任しますが、昭和54年、知事退任とともに退職しました。

敗戦や羽田での挫折（本人の言葉を借

りれば“ずり落ち感覚”)から、小説を書き始めます。昭和35年には、「暗い川が手を叩く」で芥川賞候補になっています。

著作は、「名将に学ぶ人間学」、「宮本武蔵の人生訓」、「小林一茶」、「上杉鷹山」、「小栗上野介」、「米百俵と小林虎三郎」、「新撰組の光と影」など多数あります。

彼の書は、歴史に題材を求めながら現代に通ずること(経営管理、組織と人間、リーダーシップなど)をテーマにしているのが特徴で、童門流と云われ定評のあるところです。



童門冬二

○ 黒田如水伝

さて、「水五訓」を探る前に、童門冬二の書いた小説「黒田如水」から抜粋して、如水伝を紹介しておきましょう。

不出生の軍師と言われる黒田官兵衛孝高は、天文15年(1546)、姫路で生まれました。

童門は、「黒田如水の一生は、文字通り今の言葉を使えば、“危機管理連続の生涯”とっていい。備前の吉井川のほとり黒田の庄に拠点を置いていた一家は、やがて播磨(兵庫県)の姫路に移った。一土豪である。それが、のし上がって、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三天下人に仕えた。坂口安吾さんの言葉を使えば、“二流の人”といわれた。なぜ二流の人かといえば、“頭が良すぎて、それが災いした”ということである。織田信長も豊臣秀吉も徳川家康も、終始一貫して如水を疑い続けた」と言います。

ひとつに、「かつて豊臣秀吉が戯れに周りにいた大名たちに、“もし俺が死んだら、次の天下人になるのは誰だと思おう?”ときいたことがある。その時大名たちは、前田利家だとか徳川家康だとか蒲生氏郷だとかの名をあげた。ところがひとあたり名がでたところで秀吉はニヤリと笑って首を振った。“違うな。俺の後を狙っているのは、九州にいるあの足の悪い禿頭だ”」と言った、と伝えられています。

この話をきいた官兵衛（44歳）は、秀吉の疑いを解くために、家督を子に譲り隠居し、黒田如水と名を改めたとされています。

また、如水（48歳）は秀吉の朝鮮出兵や宣教師追放令の際、意に添ぐわない行動を取ったために、秀吉の逆鱗に触れます。

そこで、「如水は非常手段に出た。それは、髪を剃って出家したことである。

“如水”という号はすでに名乗っていたが、これに“円清”の2字を加えた。

これは、“水は方円の器にしたがう”と言う言葉と“心は水の如く清し”と言う言葉によったものである」。

黒田藩（筑前福岡）52万石の藩祖である如水は、慶長9年（1603）の春、伏見の藩邸で亡くなりました、59歳でした。遺体は、京都大徳寺の一角に葬られ、戒名は、「竜光院殿如水円清居士」と付けられました。

彼が死ぬと、キリシタン禁制下であっても、福岡・博多の町にいたキリスト教徒たちはひっそりと葬儀を行ったと記録が残されています。生涯側室を置かず、一人の妻のみを愛し、書状にはローマ字印を使ったキリシタンの如水でした。



黒田如水像・福岡市博物館蔵

童門は、終章で「如水の場合は、頭が鋭すぎたために、つねに人間関係が危機状況に陥った。ひとつひとつそれをほぐしていくために、如水がそういう事件に遭遇するたびに自ら体得していったものである。この点も含め、如水からは、“清濁あわせのむ生き方”を学び取ることができるだろう」と述べています。

○ 水五訓

ここで、「水五訓」を掲げて置きましょう。

上に立つものは、「水の如くあれ」と良く言われます。老子は、「上善如水（上善は水のごとし 水は善く万物を和

- 一 自ら活動して他を動かすは水なり
- 二 常に己の進路を求めて止まざるは水なり
- 三 障害にあい激しくその勢力を百倍し得るは水なり
- 四 自ら潔うして他の汚れを洗い清濁併せ容るるは水なり
- 五 洋々として大洋を充たし発しては
蒸気となり雲となり雨となり雪と交じ霞と化し
凝っては玲瓏（れいろう）たる鏡となりえたるも
其性を失わざるは水なり

して争わず 衆人のにくむ所に処る 故に道にちかし」を説いています（どこぞにこんなお酒もありますが）。私論、黒田官兵衛如水が「水五訓」を人生訓にしていたとすれば、このへんにあったのでしょう。

「水五訓」の「水」の所を、童門流に、「社長」、「リーダー」と置き変えて読み直してみてください。

ところで、筆者は、昨年、尾道の天寧寺の庭で「石徳五訓」なるものを見かけました。

住職に尋ねたところ、「永平寺の泰禅和尚が94歳の時に述べたものを碑としたものだが、どうやら、これは中国から伝えられたものらしい」と述べておりました。

思うに、住職の言うとおりで、「水五訓」も、中国（王陽明の「水五訓」）から伝えられたもので、或いは黒田如水も

これを知っていて人生訓としていたのかもしれませんが。

○ お礼の言葉

ひよんなことから、「水と文学」を書き出して、16回を数えてしまいました。

当初12回の予定が、ジャーナル側の意向もあり、4回増えてしまいました。この間、拙い文章を読んで頂き、組合員の皆様には大変感謝いたしております。

あと何人か（田山花袋、大町桂月、国木田独步、中里介山、他）を書いてみようかとも思っていました、ここいらへんで良いのではないかと思いました。エッセイストや詩人などを含めれば、まだたくさん「水と文学」が書けるような気もしました。

機会があれば、また書いてみようとも思います。ともあれこの号をもって終わりと致します。永い間読んで頂き、本当にありがとうございました。